

[特別企画1] 第2部 司会のことば

地域からの挑戦
「災害にどう対応したか」

豊岡重剛

福井県赤十字血液センター

宮本行孝

日本赤十字社血液事業本部

東日本大震災の被害も癒えるまもなく、熊本・大分地震に見舞われ、今後も東南海トラフ地震を始めとする巨大地震や直下型地震も想定され、また近年異常気象によるものか想定外の地域での豪雪や台風被害、前線に伴う豪雨被害も頻発しているなか、また離島など遠隔地においても、どのような状況におかれても、安全な血液を安定的に迅速に医療機関に届けることは我々日本赤十字社に課せられた責務です。本年1月には本社から危機ガイドライン(第7版)が発出され各血液センターでは災害に備えたマニュアルも整備されているところです。今回4人の演者の方から各地域・職域の危機管理についてご報告いただきました。

第1席は山梨県赤十字血液センターから秋山進也さんに平成26年2月の豪雪時の山梨センター供給課の対応についてご報告いただきました。豪雪に伴う交通機関の障害に対し配送補助者を追加し2名乗車体制としたこと、徒歩圏内の職員を招集して配送に当たらせたこと、特別の許可をもらって自動車道路を使わせてもらったこと、ヘリコプターにて血液の受け入れを行ったことなどの報告がありました。危機管理マニュアルの見直しや、資材の整備に努めていること、職員の非常召集訓練も実施していることなど他の災害にも応用すべき内容の報告でした。

第2席は長崎県赤十字血液センターから供給課長草野敏樹さんに広大な地域に多くの離島を抱える血液センターの対応についてご報告いただきました。長崎県は多くの離島を抱え、基幹病院4病院を備蓄医療機関として指定しているが予想外の

出血や複数の患者発生などで島内備蓄がなくなる緊急事態に対して海上自衛隊および県防災ヘリにての血液緊急輸送システムを構築したこと。6年間における6事例(7名)について詳細な紹介がありました。血液緊急輸送システムと備蓄医療機関における安定在庫と期限切れ返品率の難しい課題に取り組んでいる現状の報告がありました。

第3席は高知赤十字病院第一内科部長溝渕樹さんから高知県における南海トラフ巨大地震時の輸血用血液製剤の緊急供給体制についてご報告をいただきました。高知センターは海岸沿いの低地に位置し、南海トラフ巨大地震に伴う津波被害時には血液センターから陸路での血液供給が困難になることが想定されるため、県と血液センターおよび災害拠点病院の3者で協議し災害時緊急供給体制について協定を締結したこと。災害拠点病院に県の予算で血液センターが使用できる保冷庫を常備したこと、災害時には直接ヘリコプターにて災害拠点病院に搬送することを想定していること、血液センターの職員が災害拠点病院にて直接輸血用血液の管理することなどが挙げられました。ヘリの調達、職員の応援体制、手順の整備など多くの課題も残っているとのことでした。

第4席は東海北陸ブロック血液センター学術情報課長八代進さんから医薬品営業所管理者としての、日常の業務の中における危機管理について、2年間愛知センターにおいて医薬品営業所管理者をお勤めになり、大変苦労されたことを踏まえての報告でした。医薬品営業所管理者は血液製剤の安全に直結する判断を求められることも多く判断

を誤れば危機に直結する。エビデンスに基づく判断が常にできる環境を整えること、現場の情報を営業所管理者に逐一報告できる体制の構築が重要であることを訴えられました。最後に血液センターの薬剤師は、営業所管理者に何時任じられても十分活躍できるように日頃から備えなければならないとの提言をいただきました。

まとめ

日本列島は地形、風土、災害も多様であり、どこでも想定外の災害が起こっているのが現状です。その意味で、今回4つの地域のいろいろな災害、いろいろな立場の取り組みをご紹介いただきました。これらの貴重な経験と各種の取り組みの報告は今後の各センターにおける危機管理の整備になにかと役立てていけるものではないかと思います。今回の企画にあたりご報告をいただいた各演者の皆様に感謝申し上げます。